

飲料水水質試験成績書の見方

		飲料水化学試験（項目 No.1～10）	
		不適なし	不適あり
飲料水 細菌試験 （項目 No.11、 12）	不適なし	○ 井戸水（地下水）は天候や周辺の環境によって水質がかわるおそれがあります。 <u>念のため煮沸消毒や塩素消毒を行ってから</u> 飲用することをおすすめします。	× 飲用以外の 雑用水 （トイレの流し水・散水など）に御利用ください。
	不適あり	△ <u>飲用前に煮沸消毒や塩素消毒により殺菌を行ってください。</u>	× 飲用以外の 雑用水 （トイレの流し水・散水など）に御利用ください。

○・・・飲用できます

×・・・飲用できません

△・・・条件あり

よくある質問

Q. 項目 No.1～10 の飲料水化学試験（色度・濁度・臭気・pH値・硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素・亜硝酸態窒素・塩化物イオン・TOC・硬度・鉄及びその化合物）に1つでも「**不適**」があった場合、飲用できないのですか？

A. 飲用できません。

飲用以外の**雑用水**（トイレの流し水・散水など）に御利用ください。

ただし、井戸水の成分によっては洗濯物に色がついたりすることがありますので御注意ください。

口に入る可能性があるのでお風呂に使用するのは避けてください。

食器などを洗う場合は、最後に水道水で十分すすいでください。

Q. 項目 No.11、12 の飲料水細菌試験（一般細菌・大腸菌）のいずれかが「**不適**」の場合、どうすれば飲用にできますか？

A. 飲用にする場合は、必ず一度煮沸消毒や塩素消毒により殺菌を行ってください。

ただし、煮沸消毒や塩素消毒を行っても、殺菌等が十分とならない病原生物が存在する場合がありますので、特に乳幼児や高齢者の方などは、飲用を控えてください。

そのまま使用する場合は雑用水（トイレの流し水・散水・洗濯など）に御利用ください。

口に入る可能性があるのでお風呂に使用するのは控えてください。

食器などを洗う場合は、最後に水道水で十分すすいでください。

飲料水水質試験の項目と基準値



飲料水水質試験は、水質基準 5 2 項目のうち、主として環境からの汚染の有無についての試験を行っています。この試験で行う試験項目、飲用適否の判断基準は下記のとおりです。

分類	項目	基準値	解説
飲料水化学試験	1.色度	5 度以下	水の色を示し、植物等が微生物に分解されたフミン質の色調と同じものを測定します。下水等の混入や地質の鉄・マンガンなどが着色の主な原因です。
	2.濁度	2 度以下	水の濁りの程度を示します。濁りの原因は、砂や粘土によるものが多く、プランクトン・微生物の存在、種々の排水の混入などによる場合もあります。
	3.臭気	異常でないこと	臭気の原因としては、汚水の混入、プランクトンの繁殖、地質、塩素処理などがあります。
	4.pH 値	5.8 以上 8.6 以下	水の酸性・アルカリ性の程度を示します。中性は pH 7 で、数値が大きくなるほどアルカリ性が強くなり、小さくなるほど酸性が強くなります。工場排水や汚水などが混じった場合、酸性やアルカリ性になることがあります。
	5.硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素	10mg/L 以下	自然界にもありますが、主な原因は肥料、生活排水、腐敗した工場排水などです。これらを多量に摂取すると、乳児に悪影響（メトヘモグロビン血症）を引き起こすことがあります。
	6.亜硝酸態窒素	0.04mg/L 以下	
	7.塩化物イオン	200mg/L 以下	海水や汚水の影響を受けていない場合、塩化物イオンは 30mg/L 程度となります。海岸地帯での海水の浸透、し尿や汚水等の混入により高くなります。
	8.TOC（全有機炭素）	3mg/L 以下	水中に存在する有機物の炭素の総量で、水の汚れ具合をみる目安となります。清浄な水ほど小さく、し尿や汚水などが混入すると高くなります。
	9.硬度	300mg/L 以下	硬度は、水中のカルシウムイオン、マグネシウムイオンの量をこれに対応する炭酸カルシウムの量に換算して表したものです。飲料水には、10～100mg/L が理想的です。300mg/L をこえると、洗濯時の泡立ちが悪くなったり、下痢をおこしたり、湯あかがたまりやすくなったりもします。地質の影響、海水や汚水の混入等により高くなります。
	10.鉄及びその化合物	0.3mg/L 以下	鉄分は地中の中に広く分布し、比較的多く含まれていることがあります。また、工場排水や鉄管の老朽化により検出されることもあります。鉄分が多い水は、カナケ味、着色、濁りを生じたり、洗濯物への着色を生じたりします。
飲料水細菌試験	11.一般細菌	1mL の検水で形成される集落数が 100 以下	水の汚染の程度を示す指標で、清浄な水では少なく、汚染された水ほど多い傾向にあります。著しく多い場合、病原生物に汚染されている可能性があります。
	12.大腸菌	検出されないこと	糞便による水の汚染を確かめるものです。大腸菌が検出されることは、赤痢など水系感染症の媒介となる可能性がありますから、必ず消毒するか、沸騰してから用いてください。